

「肥後の水資源愛護賞」顕彰活動

財団法人 肥後の水資源愛護基金

1 はじめに（熊本の水資源保全活動を始めるに至った背景）

熊本市は、市民67万人（熊本都市圏90万人）の上水道水の水源が、100%地下水で賄われている全国でも稀な水に恵まれた地域です。更に、その地下水は、質的にも優れており、旧厚生省の「おいしい水研究会」では、全国ベスト3の一つに選ばれており、正に天然のミネラルウォーターという素晴らしい水資源をもっています。

この熊本都市圏の地下水は、太古、阿蘇火山の大爆発による火砕流が熊本平野部に至るスポンジ状の地層を形成し、阿蘇のカルデラと外輪に降った雨水をろ過、大量の地下水を貯留するという天与の仕組みから、もたらされてされているものです。

その地下水に、近年、量・質とも目に見えて危険信号が点滅し始めているのに、地下水かん養策は手つかずで、しかも揚水量は増加傾向にある時、水資源保全の幅広い啓発活動と実践行動化は緊急の課題でありました。しかるに、未だかつて水不足を経験したことの無い熊本市民は、熊本の水の貴重さ、その将来、枯渇にもなりかねない現状に全く無関心でありました。

2 「肥後の水資源愛護賞」を創設

昭和62年（1987年）、肥後銀行長野吉彰頭取（当時）は、「熊本の質量ともに日本一の地下水を子や孫



写真1 肥後の水資源愛護賞 表彰式

に残そう」と提唱して、熊本日日新聞社との共催で「肥後の水資源愛護賞」を創設しました。この賞は、水資源のかん養・保全・節水・水質汚染防止に最低2年以上真剣に取り組み、着実な成果をあげておられる熊本県内の自治体・企業・各種団体・個人などを顕彰して、県市民の水への関心を啓発し、水資源の保全活動の普及を目的とした賞であります。

3 愛護賞創設の動機

「熊本のかけがえのない自然環境とりわけ地下水資源を守り抜く」という理念と、「21世紀の都市間競争を考える時、水は、地方都市発展の最優位の戦略資源になる」という長野理事長の提唱のもと創設されました。

もともと長野理事長が、熊本の水を守らなければならないと深い思い入れを抱くに至りました契機は、昭和35年水俣病の悲惨な実態を取り上げた水上勉氏の小説「海の牙」を読みショックを受けたのが発端でした。

ついで、東京・隅田川の悪臭と汚濁化や長崎市でひどい水不足を体験して、いよいよ古里熊本の水の有難さを実感しました。更に、湧水で有名な熊本市水前寺公園の池や江津湖の湧水が極端に少なくなっているのを見て、これは今のうちに早く対策を講じないと大変なことになるとの深い思い入れが、そのきっかけとなりました。

4 表彰実績とその経緯

昭和62年「肥後の水資源愛護賞」顕彰事業を創設。以来平成18年度までの20年間、20回表彰、毎年県内各地から40～50件の推薦があり、その中から10～15件を表彰。表彰数は、これまで県内の延べ239団体11個人の多くに達しています。

表彰先は、自治体、婦人会、老人会、大企業、中

小企業、学校、病院、ボランティア・グループ、個人など多種多様です。1件の助成金は、10～50万円。創設当初は、銀行が「なぜ水か？」と訝る声も聞かれましたが、4～5年も経つと地域の人にも漸次理解され、さらに支持・協力を頂けるようになりました。

20年の間には、表彰先の候補ジャンルにも時代的变化がみられました。最初の3～4年間は水源地や川の清掃グループ、ホテルを育てる会等といった“やゝ心情的な奉仕活動メンバー”が多かったが、回を重ねるにつれて有効微生物や特殊な貝類等を活用した大掛りな河川浄化の実践グループや、独自の工夫で洗車やトイレ洗浄用等の雨水利用化の実践など、技術志向で効果的な実践例が次々と生まれてきました。

自治体では、熊本都市圏の良質地下水の涵養地域である白川中流域に位置する菊陽町等が、役場用地や町内小中学校の運動場への雨水貯留地下浸透に注力。また、町内水田・人参畑の年間湛水浸透に補助金制度を導入し多大な効果を収めつつあります。

特に、熊本テクノポリス建設に伴う進出大手企業では、工業用水のリサイクル利用や有害物質の排出防止などの先端技術的設備投資、さらには工場全域の植樹倍増など、地下水涵養や節水に努め、域内地下水収支のプラス化を目指している本田技研熊本工場や、九州NEC、三菱電機などはそのモデル的存在。ごく最近では、ソニーセミコンダクタ九州、東京エレクトロン、サントリー、南九州コカコーラボトリングなどが、愛護賞を受賞しています。地場中小企業にも、北村プレス工業所、熊本防錆工業など真剣に努力している先が誕生しつつあります。

5 「肥後の水資源愛護基金」を設立

平成4年9月、水資源愛護賞活動の持続性ならびにより一層の充実と、その活動の拠点を明確にするため、肥後銀行とその関連会社の出捐(2億3千万円)により、財団法人「肥後の水資源愛護基金」を設立しました。同基金の事業は、「愛護賞表彰事業」を中核に、「水保全のシンポジウム」「新聞・雑誌・テレビなどによる広報普及活動」「節水器具の巡回展示と節水コマ・泡沫蛇口の無料配布」な

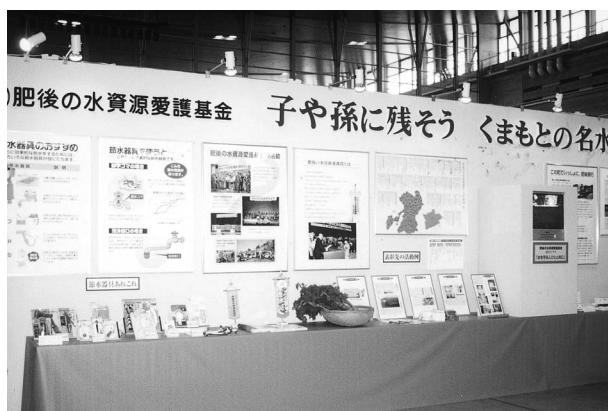


写真2 節水器具展

どを実施しています。水保全にかかわるシンポジウムは、平成6年から現在に至るまで、毎年1回、愛護賞受賞者の体験発表を中心に現場の実践活動にもとづく貴重な発言で、毎回ホール満席(約500人)の来場者の共感を得ています。更にこの発言内容を新聞などで多くの人に伝えていきます緑化運動として平成13年から毎年(今年で7回目)、阿蘇を中心に植樹活動を実施しています。



写真3 植樹活動

6 活動資金は主として母体行肥後銀行の役員・退職者・運動に賛同されるお客様の拠金で支えられています。

財団創設後、肥後銀行役員、退職者並びに関連会社役職員の皆様から自発的なご寄付を頂いてきました。これは、その後今年まで14年間安定的に続いています。更に刮目すべきことは、肥後銀行を定年退職される役員が退職金の中から、かなりの額を寄付される方が多いことであり、また、活動の趣旨に賛同されて、多額の寄付をして頂く永年のお得意様もおられます。

この暖かい寄付金が基金の毎年の活動資金のほとんどを占めており、肥後銀行行員が高い意識と誇りさえ持って、愛護基金を支援しています。

7 「肥後の水資源愛護基金」ならびに「肥後銀行」の水資源保全活動実績

「自ら活動して他を動かす」の実践努力として、水資源愛護基金と肥後銀行は、自らも次のような実践活動に取り組んでいます。

当行本支店全店の水道蛇口に節水コマや泡沫蛇口を取付、 自社所有グラウンドへの雨水地下浸透マスの埋設、 20数ヶ所の営業店駐車場の透水性舗装、 店舗新築の際の雨水貯留システム導入、 本支店全店における女性用トイレの擬音装置「音姫」約400基の設置、 などを実行し多大な効果をもたらしています。

熊本市の江津湖近くに住む肥後銀行行員とその家族3～40人は、平成1年から現在に至る18年間、毎月1回江津湖周辺を清掃しています。



写真4 清掃活動

8 「阿蘇大観の森」の購入と植樹

母体行肥後銀行は、平成18年2月、阿蘇外輪山の大観峰の麓に52haという広大な森林・原野を購入しました。同年4月「阿蘇大観の森」と命名、第1回目の記念植樹2,000本、平成19年4月、6,000本の広葉樹の苗木を植樹しました。

同地には今後10年間で、15万本の保水性の高い広葉樹の植樹を計画しています。もともと、当基金並びに肥後銀行は、平成13年から毎年1回、現在まで7回、阿蘇の原野に合計14000本の苗木を植樹



写真5 阿蘇大観の森

しています。植樹には、毎回、肥後銀行役職員、OB、OG、地元の人など500～600人が参加され、年を追って参加者数は増えています。

9 おわりに（今後の活動方針）

平成18年11月、長野理事長は「肥後の水資源愛護賞創設20周年記念式典」の挨拶で、今後の活動方針として「5つの誓い」を宣言しました。

「肥後の水資源愛護賞」顕彰事業の充実に努める。水質汚染防止のために、汚染の実態を研究機関や学識経験者と連携して、その把握に努め、行政へ連絡の上、情報公開につとめる。

「阿蘇大観の森」に今後10年間で15万本の広葉樹を植樹する。

水源かん養のための植樹に継続的に携わる団体、個人に対し、選考の上、苗木の提供を行う。

今後は、一段と肥後銀行用地に地下水浸透施設の拡充、節水設備の充実に努めるとともに、都市温暖化回避のため緑化事業などを率先して行う。

以上の方針を踏まえながら、これからも、こつこつと地道な反復継続の水資源保全運動を続けてまいります。

常務理事 藤本昌通